

ウェンディー・ロジャーズ¹の陳述書

貴法廷に二つの証拠を提出し、意見を添えたい。最初の証拠は、中国の臓器入手が国際倫理基準に準じていないことに関するものであり、二つ目の証拠は、処刑された良心の囚人（無実の人々）からの臓器入手に関する証拠に対する国際的な移植界をリードする一部の者の態度・行動に関するものである。二つ目の証拠に対して、考えられる理由を意見として提示する。

1. 国際倫理基準に準拠しない中国の臓器入手²

臓器提供の倫理における専門家として私は、中国で移植を受けるレシピエントのデータを報告する論文が国際的な倫理基準に準拠するかを調べる調査チームを率いた。

処刑された囚人から移植臓器を摘出することは、世界保健機関(WHO)、世界医師会(WMA)、国際移植学会(TTS)、アムネスティ・インターナショナルなどから幅広く譴責されてきた。この譴責は調査へと展開され、処刑された囚人から得た臓器の使用に関わる調査結果が提示された。2006年、国際移植学会は、処刑された囚人を臓器源とする研究に基づく論文を受理しないと明示した。2006年の国際移植学会のこの声明は、処刑された囚人の臓器に関わる研究を基盤とする論文掲載を拒否する要求へと至り、国際機関、専門学会、大学、学術誌による数々の声明で、処刑された囚人を臓器源とする研究の発行・発表を禁じる倫理基準が明示された。

これらの倫理基準として、査読者および学術誌の編集者には常に下記が求められる。

- (1) 研究は処刑された囚人からの生体試料が使われているか？
- (2) 研究は施設内倫理委員会 (IRB) の承認を得ているか？
- (3) ドナーの承諾を得たか？

これらの倫理基準を堅持するために、基準を満たさない論文は拒否すべきである。

様々の分野にわたるボランティアの調査者グループとともに、中国本土で実施された肺、肝臓、心臓の移植手術に関する論文を対象に、スコوپング・レビューの方法で系統的解析をした。2000年から2017年までに該当する論文は445編あり、合計で8万5000件以上の移植手術が報告されていた。

これらの論文は下記の通りに分類できる。

- 1) 33編 (7%) の論文は、処刑された囚人の臓器は研究に用いていないと明示。
- 2) 324編 (73%) は、生命倫理の承認を受けたと報告。
- 3) 6編 (1%) は、ドナーが臓器提供を承諾したと報告。

国際移植学会などの国際的機関が義務付けている倫理基準の3項目をすべて満たしている論

文は1%未満だった。倫理基準に準拠していないにも拘わらず、この情報を提示していないという理由から学術誌に掲載されないということではなかった。

さらに、処刑された囚人からの臓器は用いていないとする33編の論文の多くは明らかに偽りであった。この中で、処刑された囚人から得たものではないとする19の論文では、2010年以前に2688件の移植手術を報告しているが、2010年以前は、中国全域で自主的臓器提供者は120名に過ぎなかった。その他の臓器源は、中国の認めたとところによると、処刑された囚人だった。

この調査の結果、2000年から2017年4月までに中国での移植手術に関する研究論文のほとんどは、囚人の臓器を用いる研究の排除およびドナー承諾の規定に関して、倫理基準に準拠していないことが判明した。

(広義の) 国際的な移植医学界に所属し論文を査読した学者、並びに論文掲載を受理した学術誌の編集者が、それぞれ専門家としての倫理基準を適用していないことが、本調査で明らかになったことは、かなり憂慮すべきである。

ジェイコブ・ラヴィー教授とマリア・フィアタロン・シング教授とが共同で行った別の調査では、肝臓の医学雑誌『Liver International』に報告されたある論文に、移植臓器が全て自主的臓器提供者と偽って記載されていることが示された。我々の調査の結果により、公開質問状を2報投書し、この論文は同誌から取り消された³。

本調査の結論として、国際的な移植医学界は、中国での移植研究で報告されている臓器源に関して必要最小限で大雑把な調査をもする姿勢がほとんどないことが示された。国際機関が危惧を表明しないことが、広域にわたり中国の移植研究者が倫理基準に準拠しない理由の一つにもなっている。中国の移植学界が国際的な倫理基準に準拠しない限り、中国との関わりや中国の医師を同僚として国際的に受け入れることを拒否すべきという国際移植学会が公言した方針にも拘わらず、この問題への取り組みが見られない。

2. 「処刑された良心の囚人の臓器源」に対する国際移植医学界の態度と行動

三年にわたり、中国での臓器源をテーマとして調査をしてきたが、移植医学界の重要人物でオーストラリアのシドニーに居住するジェレミー・チャップマン教授とフィリップ・オコネル教授の2名は、良心の囚人からの強制臓器収奪に関する証拠を積極的に受け入れようとしていない。彼らの態度は不正行為を一蹴し、中国の否定を繰り返し、強制臓器収奪の疑惑は「法輪功」グループの政治的戦略であると主張する。

私の見解を裏付ける証拠を提示したい。

良心の囚人を臓器源とする疑惑を最初に認識した際、共通の知人を通してジェレミー・チャップマン教授（国際移植学会の元会長）にメッセージを送った。知人を通して伝えられた返答は下記の通り。「中国では臓器のための殺害により無実の人々を迫害していると本気で信じている正真正銘の人道主義者がおりますが、この話には実体はありません。中国の移植病棟を実際に訪れ、この種の行為を探しても見当たりません」（2015年11月27日の私信で、匿名で受け取ったコピーメッセージ）。しかし、中国への訪問者が良心の囚人からの臓器収奪を見せてもらえなかったということは事実無根の裏付けにはならない。

それ以後、チャップマン教授の論調は、良心の囚人の臓器源への言及をより強く否定するようになる。一例として、（オーストラリア上院での）「外交貿易合同常任委員会」での彼のコメント⁴を挙げよう。彼の説明の中で（2016年報告書“Update”の要約に基づく）年間6万から10万件の移植件数を「でっちあげ」としている。2ページ目にチャップマン教授は、中国での移植患者の入院期間について詳細を述べ、中国での年間臓器移植件数が6万から10万件だとすると、米国の30～40倍の移植手術のためのインフラが必要とされると結論づけている。理解に苦しむ論拠であったため、同教授にEメールで明確にして欲しいと問い合わせたところ、中国では患者は数週間入院するが、米国やオーストラリアでは4～6日である（2018年6月6日のチャップマン教授との私信。コピーを本法廷に提出）としている。この回答は、チャップマン教授が2016年報告書“Update”の算出方法を理解していなかったことを示す。年間6万から10万件の移植件数は、一人あたりの入院期間を4週間と見積もって算出したことに対する認識がないようだった。

同じ文書の中でオコネル教授（4ページ）は中国の臓器登録制度であるCOTRSに言及し、この登録制度に登録された移植は合法的だとしている。しかし、この登録制度は独立した監査への公開はなく、オコネル教授が語ることはすべて中国側の言い分通りである。チャップマン教授同様、オコネル教授も「かなりの改革が実施されたと確信している」が、この「確信」は中国側の招聘で訪中の際に、選択され提供された情報と病院から知り得たものにもとづいている。情報は通訳を通して与えられたものである。これらの国際移植学会の代表者には、中国が主張する臓器源が真実であるかを独立して把握する術はない。

さらに信頼のおける調査への消極的な姿勢を示す証拠がある。2016年7月、「2016年報告書“Update”」の発表後まもなく、著者の一人であるイーサン・ガットマン氏がオーストラリアを訪問した。私は、ガットマン氏と移植医学界との会合を斡旋し、これらの人々に「2016年報告書“Update”」の証拠と調査方法を把握してもらい、調査における欠陥の可能性や弱点を指摘してもらおうと思った。移植医の知人を通して会合の手配を助けてもらおうと連絡したところ、この知人を通してチャップマン教授は会合を手配すると言ってくれた。私は受け入れたが、誰が参席するか、「政治的」になるのではないかと、教授のオファーは撤回された。そのようなことはないかと教授にメールで念を押したが、長い間、交信した結果、最終的に自分で会合を手配することにした。関心を寄せていると言っていたチャップマン教授は、結局、会合には参席しなかった。私の個人的な見解で証拠があるわけではないが、同教授は他の移植医に参席しないように警告した

と思われる。最終的に、一人の移植医だけが参席したが、数人の同僚も参席の意図を示していたということで、参席者が自分だけであることに本人もショックを隠せない様子だった。

また、移植医学界の人々との他の経験からも、臓器収奪のあらゆる主張を断固として否定する姿勢が移植医学界の内部にあることが示された。否定は、主に中国からの実証できない確約に基づくもので、この問題に対して今日まで重ねられてきた詳細な調査と莫大な証拠に無知であることも要因となっている。

移植医学界の人々の態度に関する見解

移植医学界の人々との直接的な対話はほとんどないので、良心の囚人からの強制臓器収奪に関する証拠に対する全般的に消極的な態度に関しては推測するしかない。一度だけ例外があった。2017年、国際的な移植医学界の一人の人物と、匿名にして欲しいということで、長く会話をした。年間移植件数が6万件から10万件ならば、外部から中国を監視するオブザーバーにとって自明なはずだと強調していた。(その場に居合わせた)私の情報提供者は、臓器の透明なトレーサビリティ(ドナーの追跡)が欠如する中でいかに中国での移植件数を割り出したかを説明できなかった。強制臓器収奪の発想は考えるだけでも恐ろしすぎると認めるに終わった。

処刑された良心の囚人からの臓器入手に関して「敢えて気付かないふり」をする状況は、以下のように説明することが可能である。但し、正確さやその他の点において裏付けがないことを強調する。

1. 黄潔夫はシドニーで数年間移植外科の研修を受けた。その際、ジェレミー・チャップマンなど現在指導的立場の臨床医が同僚にいた。職務上および個人的な付き合いを考慮すると、オーストラリアの移植臨床医にとって、黄潔夫が良心の囚人からの強制臓器収奪制度の責任者であることは信じ難いかもしれない。死刑宣告を受けた囚人の臓器を摘出する非倫理的な制度に立ち向かい改革する黄潔夫に、力を貸そうという英雄話の方が、臨床医にとっては受け入れ易い。黄潔夫は良心の囚人からの強制臓器収奪を激しく否定する。このためオーストラリアの臨床医がこの問題を取り上げると、中国での改革をある程度支援することで達成されうる可能性や、中国との関係に危険を及ぼしかねない。
2. シドニーの病院と中国国内の病院の間に広範囲にわたる高度の研究その他の交流関係が存在する。移植に関するものも含まれる。例えば、2011年、湖南省の中南大学湘雅医院と、シドニーのウェストミード病院の間で覚書が交わされた。この覚書の詳細を直接知る立場にはないが、中国のメディアが発表した取り決めの詳細によると、学术交流には、移植に関わる臨床および研究活動も含まれている。中国の研究には動物の組織を人間に異種移植することも含まれており、当時のオーストラリアでは認められていないことであった。この研究を報告する2011年の論文で、著者の一人 Shounan Yi 氏は、ウェストミード病院に学術的所属と報告されている⁵。2016年、オーストラリアのメディア記事⁶で、この共同研究との関わりについての倫理性が問われた際、ジェレミー・チャップマン教授が強く否定した経緯がある⁷。

3. 最後に、中国の移植医がその医療行為に関して公に語る自由がないことへの懸念を説明したい。中国国内の監視と残虐な弾圧の度合いは、欧米の基準でははかり知ることができない。
(欧米の) 臨床移植医の中には、「告発者が出るはずだから良心の囚人からの臓器収奪を隠蔽することは不可能である」との見解を持つ者もいる。中国での全体主義制度および告発を考える者への威嚇の深刻さを認識していないがゆえの見解である。

本法廷のお役に立つのであれば、これらの問題に関してさらに詳しい情報を提供したい。

ウェンディー・ロジャーズ

2018年11月17日

脚注：

¹ See Appendix 1 for my credentials.

² This evidence is based upon Rogers WA, Robertson M, Ballantyne A, Blakely B, Catsanos R, Clay-Williams R & Fiatarone Singh M. Compliance with ethical standards in the reporting of donor sources and ethics review in peer-reviewed publications involving organ transplantation in China: A scoping review. *BMJ Open* (accepted 13 Nov 2018), and is provided to the Tribunal in confidence. Once the paper is published, it can be made available to the Tribunal members. Please do not cite or repeat any data from this statement without permission.

³ Rogers WA, Fiatarone Singh MA, Lavee J. Papers based on data concerning organs from executed prisoners should not be published. *Liver International* 2017; 37:769; and Rogers WA, Fiatarone Singh MA, Lavee J. Papers based on data concerning organs from executed prisoners should not be published: Response to Zheng and Yan. *Liver International* 2017; 37: 771-772. Both letters are available from the Supplementary Reading list supplied to the Tribunal.

⁴ See Appendix 2 (with highlight on relevant sections)

⁵ Wang W1, Mo Z, Ye B, Hu P, Liu S, Yi S. A clinical trial of xenotransplantation of neonatal pig islets for diabetic patients. *J Cent South Unw (Med Scz)* 2011 Dec;36(12):1134-40. doi: 10.3969/j.issn.1672-7347.2011.12.002 (copy available on request).

⁶ See e.g. 'Chinese organ harvest furore', John Ross, *The Australian*, August 24, 2016.

⁷ 'Westmead Hospital rejects China link transplant 'benefits'' John Ross, *The Australian*, September 7, 2016.